紫式部日記の作品世界と表現

――目　次

はじめに　――『紫式部日記』という作品――……1
一　『日記』の内容とその多様な表現形態について……2
二　『日記』の内容の二面的性格と多様な表現形態に関する主な見解について……5
1　『日記』の内容の二面的性格に関する見解について……5
2　『日記』の現存形態に関する見解について……8
三　『紫式部日記』という作品をどう捉えるか……10
第一章　主家賛美の表現（1）――「をかし」をめぐって――……21
第一節　『日記』における「をかし」の使われ方について……23
第二節　「敦成親王誕生を中心とした記録的部分」における「をかし」について……25
第三節　「いわゆる〈消息〉体による随想的部分」における「をかし」について……27
一　「中宮女房個人批評」における「をかし」について……27
二　「斎院所と中宮所との比較批評」における「をかし」について……28
第四節　『日記』冒頭部と「年次不詳の十一日の暁」の記事における「をかし」について……34
一　『日記』冒頭部の「をかし」について……34
二　年次不詳の「十一日の暁」の記事における「をかし」について……36
第二章　主家賛美の表現（2）――「いまめかし」をめぐって――……40
第一節　「敦成・敦良両親王誕生を中心とする記録的部分」における「いまめかし」について……41

一　「敦成親王誕生を中心とした記録的部分」における「いまめかし」について……42
二　五節の舞姫への「いまめかし」について……46
三　「敦良親王誕生に関わる記録的部分」における「いまめかし」について……49
四　『日記』の「いまめかし」の持つ時間軸……54
第二節　「いわゆる〈消息〉体による随想的部分」における「いまめかし」について……57
一　小大輔批評における「いまめかし」について……58
二　宮の内侍批評における「いまめかし」について……62
第三節　年次不詳の「十一日の暁」の記事における「いまめかし」について……73
一　中宮大夫斉信に対する「いまめかし」について……73
二　当時の人々の「今様歌」への認識と『日記』の「今様歌」に関する記述……79
三　再び「十一日の暁」の記事における「今様歌」について……84
第三章　《作者の憂愁の思い》を担う表現――「憂し」をめぐって――……87
第一節　「敦成親王の誕生を中心とする記録的部分」における「憂し」①～⑤について……89
一　第1節『日記』冒頭部分における「憂し」①について……89
二　第24節「一条帝の土御門殿行幸直前の記事」における「もの憂し」②について……96
三　第34節「里居の記事」における「憂し」③について……106
四　第35節「中宮の内裏還啓」記事における「憂し」④について……113
五　第38節「殿上の淵酔・御前の試み」における「もの憂し」⑤について……123

第二節　「いわゆる〈消息〉体による随想的部分」における「憂し」⑥⑦⑧について……132
一　〈消息〉体前半部（第46節～第48節）の内容……136
（1）第46節「中宮方女房の個人批評」……136
（2）第47節「斎院方女房と中宮方女房との比較批評」……137
（3）第48節「和泉式部・赤染衛門・清少納言」批評……139
二　〈消息〉体後半部「作者自身の人生述懐と宮仕えのありよう」（第49節～第51節）における《作者の憂き思い》の表出を担う表現「憂し」（含「もの憂し」「心憂し」）について……146
（1）第49節「わが身をかえりみて」の記事における「もの憂し」⑥……146
（2）第51節「日本紀の御局・楽府御進講」記事における「心憂し」⑦と「憂し」⑧について……152
第三節　「いわゆる〈消息〉体による随想的部分」の「跋文」と《作者の憂愁の思い》を担う表現「憂し」との関わり……161
一　第52節「求道への願いとためらひ」のもつ意味性について……162
二　第53節〈消息〉体部分「跋文」と《作者の憂愁の思い》を担う表現「憂し」との関わりについて……165
三　『源氏物語』登場人物をとおして語られる「ものいう行為」への思いについて……168
第四章　『紫式部日記』の回想の方法……174
第一節　『紫式部日記』の日付――その顕現と喪失――……174
一　紫式部日記の日付……174
二　日付の顕現　――皇子誕生部分――……177

三　日付の喪失（1）――「行幸近くなりぬとて」――……181
四　日付の喪失（2）――「小少将の君の、文おこせたる返りごと書くに」――……187
五　一条帝行幸「当日」記事の日付……188
第二節　〈消息〉体仮託による回想の方法……195
一　〈消息〉体仮託による随想的部分の内容……196
二　記録的部分における会話と〈消息〉体部分との重なり……207
三　『日記』の中の〈消息（〈文〉）のありよう……214
四　『日記』における随想的部分の、〈消息〉体仮託のもつ表現性について……218
第五章　『紫式部日記』の表現構造……224
第一節　中宮女房批評をめぐって……224
一　晴の盛儀と女房の装束姿……225
二　人の「かたち」……231
三　「心ばせ」と作者……234
四　再び装束へ……237
第二節　「斎院」批判をめぐって……241
一　当時の斎院サロン……244
（1）『大斎院前の御集』からうかがわれる斎院サロン……244
（2）『大斎院御集』からうかがわれる斎院サロン……249

二　二つの後宮サロンと斎院サロン……251
三　『日記』の中の斎院批判……255
第三節　道長像の描かれ方をめぐって……264
一　皇子誕生記事における道長像……265
二　歌人・文人としての道長像……269
（1）歌人としての道長像……270
（2）文人としての道長像……279
第四節　比喩表現「夢のように」をめぐって……289
一　『日記』の比喩表現の諸相……290
二　比喩表現「夢のやうに」について……297
三　『日記』の比喩表現「夢のやうに」のもつ意味性……303
第五節　土御門殿の庭園描写をめぐって……308
一　道長の私邸「土御門殿」について……308
二　『日記』に描かれた土御門殿の庭園……310
三　『日記』の庭園描写のもつ意味性について……316
第六章　『紫式部日記』の表現と文体……326
第一節　敦成親王誕生を中心とした記録的部分に見られる文体的特徴……327
一　敦成親王誕生記事（第12節）における文体的特徴……327

二　一条帝土御門殿行幸直前の記事（第24節）における文体的特徴……331
第二節　「いわゆる〈消息〉体による随想的部分」に見られる文体的特徴……333
一　「斎院御所と中宮御所との比較批評」（第47節）における文体的特徴……335
二　「作者の宮仕えのありよう」への述懐記事（第51節）における文体的特徴……336
第七章　『源氏物語』の表現……340
第一節　「夕顔」巻にみられる状況表現構造……340
一　「夕顔」巻における「物の怪」出現場面……341
二　感覚的印象による状況表現の種々相……345
三　「葵」「若菜下」「柏木」各巻における「物の怪」出現の場面描写……350
第二節　『源氏物語』にみられる女性観――紫の上への表現を中心に――……355
一　「雨夜の品定め」にみられる女性観……356
二　物語の中の女性たち……357
（1）〈空蟬〉という女性像……357
（2）〈夕顔〉という女性像……358
（3）〈紫の上〉という女性像……359
（4）〈そのほかの人物〉に見られる女性像……362
三　『源氏物語』に見られる女性観……364

おわりに――『紫式部日記』の作品世界――……366
一　寛弘五年秋から同六年正月まで……369
（1）『日記』冒頭部（序章部）……369
（2）皇子誕生ならびに各種生誕行事をめぐる部分……371
二　いわゆる〈消息〉体による女房批評と人生述懐……377
三　いわゆる〈消息〉体部分以降、寛弘七年正月まで……379
初出一覧……382
あとがき……386

はじめに ――『紫式部日記』という作品――

『紫式部日記』（以下『日記』と略記する）という作品は、どのような作品と捉え、どのように読めばよいのであろうか。文学史上の一般通念では、今日、『日記』は前後の『蜻蛉日記』や『更級日記』とともに平安時代の女流日記文学のひとつとして扱われているが、その記述内容や記述方法、作品形態等を見るとこれらの日記とは同質に扱えない点を数多くもった作品なのである。(1)

たとえば、『日記』は、『蜻蛉日記』や『更級日記』が過去の自分の人生をはるか後の晩年になって回想、執筆しているのに対して、作者が現実の宮仕え生活の中で直接見聞体験した事柄を、出来事に比較的近い時点、すなわち、宮仕え生活の現実の中で直截に記そうとしており、記録性の濃厚な「現在の日記」といってもよい作品である。また、その作品形態を見ても、『蜻蛉日記』や『更級日記』がそれぞれ個々に表現形態の差異を感じさせる部分を多少は持ちながらも作品全体としては一貫した形態を持っているのに対して、『日記』は後に示すように一つの作品の中に記録的部分、随想的部分、和歌贈答を中心とした家集的部分といったさまざまな表現形態が混在し、首尾一貫した作品形態を見せていない。しかも、これらの表現形態のうちの随想的部分は明らかに虚構と思われる文体が用いられており、『蜻蛉日記』や『更級日記』などの他の女流日記文学とは明らかに異なった特質をもった作品なのである。

むろん、こうした比較は『日記』を現存形態のままに捉えた上でのことであるが、私見としては、『日記』は現存形態のままで十分に読み得るものを持っており、むしろ現存形態のままで読むことで何が見えてくるのかを考えたいと思っている。

したがって、現存する『日記』がどのような作品であるかを把握するためには、その内容と多様な表現形態とがそ

れぞれどのようなものであり、それらが相互にどのような関わりをもっているのかを解明しなければならず、その手がかりとして、それらの内容と表現形態とを支える個々の表現が、作品世界の中でどのように機能しているかについて考察したいと考えている。なぜなら、私は、作品の中の個々の表現は表現主体である作者によって作品世界を構築するために位置づけられ、特に、他の文脈との関わりにおいて作品的意味性を担わされているとみているからである。

本書の目的も、これら『日記』の作品世界を担う個々の表現のありようとその意味性を読み解くところにあるが、まずは、本書の「はじめ」にあたって『日記』の内容とその多様な表現形態について把握しておきたいと思う。

なお、本書で引用する『日記』本文ならびに分節は、すべて「新編日本古典文学全集『紫式部日記』」（小学館）に拠る。また、分節を示す時はアラビア数字を用いることとする。

一　『日記』の内容とその多様な表現形態について

周知のように、現存『日記』の内容とその表現形態とは、一般に次のように分類される。

1　寛弘五年秋から寛弘六年正月までの「一条帝中宮彰子腹第二皇子（敦成親王）の誕生」を中心とした記録的部分

2　寛弘六年正月の御戴餅儀の記事に接続した形でつけられた、いわゆる〈消息〉体による「中宮女房批評を始めとする作者の人生的述懐」を述べた随想的部分

3　年次不詳の「十一日の暁」の記事と二つの「道長と作者との和歌贈答」による家集的部分

4　寛弘七年正月の「新年御戴餅儀」と「第三皇子（敦良親王）の御五十日儀」を中心とした記録的部分

つまり、『日記』の中心は、一条帝中宮彰子腹第二・第三皇子（敦成親王・敦良親王）の誕生とそれに伴う種々の慶祝行事の記録におかれ、中宮彰子やその父藤原道長の栄華の極みをつぶさに記録するところにあったと思われる。

作者の紫式部は、寛弘二年（一〇〇五）ごろから長和二年（一〇一三）ごろまでの約八年間、中宮彰子に仕えたと思われるが、『日記』に記されているのはその宮仕え生活の中の寛弘五年（一〇〇八）秋から寛弘七年（一〇一〇）正月に至るまでのわずか一年半の出来事にすぎない。しかし、それは皇子誕生によって道長政権の栄華の基盤が着実に構築されていくのを目の当たりにする期間であった。したがって、そうした期間の、そうした出来事のみが切り取られているということは、執筆者である紫式部自身の選択によるとも考えられるが、むしろ、そこには主家筋である藤原道長からの強い要請があったことは十分考えられるのである。

事実、先に示した『日記』の内容の1から4の配分比率についていえば、1の敦成親王誕生にかかわる記録的部分は全体の約三分の二（約66％）を占め、4の弟宮敦良親王関係記事を加えると道長家待望の皇子（それも二皇子）誕生に関する記事は実に全体の四分の三（約73％）に達している。しかも、それらの記事はいずれも生彩を極めた筆致で詳細に記録されており、個々の記述にあっては、たとえば「禄などもたまひける、そのことは見ず。」（敦成親王誕生後の「御佩刀・御臍の緒・御乳付」）、「御湯殿は酉の刻とか。」（同、「御湯殿の儀」）、「またつつみたるものそえてなどぞ聞きはべりし。くはしくは見はべらず。」（同、「七日の御産養儀」）などの表現が随所にあり、自分で見なかったことをも最大もらさず記録しようとする姿勢を見せている。そして何よりもいえることは、現存『日記』の冒頭部が中宮彰子の敦成親王出産のための道長邸（土御門殿）への里下がりから始まっており、そのころの土御門殿の華麗な光景が身重な中宮彰子の様子とともに賛美的視点によって描き出されていることである。そして道長、頼通、倫子と道長一門の代表的な人々を次々と登場させ、やがて八月二十余日、二十六日、（九月）九日、十日、十一日と日付を付しながら、「九月十一日」の敦成親王誕生の喜びに向けて記事を漸層法的に配列していく。まさにそうした表現方法

は道長の要請に応えるにふさわしい記述の方法といえる。おそらく道長は、男性官人による事実の記録を中心とした「漢文日記」とは異なる女房の手になる記録、それも『源氏物語』の作者の目で捉えられた皇子誕生の記録を欲したのではないかと思われる。もとより、道長が自分の娘である中宮彰子のもとへ紫式部を出仕させたのも、すでにこうしたことがらを想定してのことであり、そこには当然、対定子後宮ないしは対『枕草子』（清少納言）への意識が介在していたことは容易に想像できることである。紫式部としてもそうした道長の思惑を十分認識していたことであろうし、またみずからも定子後宮、特に清少納言を意識していたと思われることは、『日記』の表現からも読み取れるのである。

ところで、現存する『日記』のもつこのような特質は、まさに道長からの要請に基づく『日記』執筆を想定させるのであるが、『日記』には、こうした主家賛美的な視点による皇子誕生の記録とは裏腹に、あたかも外在する華麗な世界と対峙するかのように記される作者の憂愁の思いの叙述が随所にあることは既に知られるとおりである。そして『日記』における作者の憂愁の思いの叙述は「批評と内省」という視点からのものと捉えられ、先に示した作品形態上の1から4の内容でいえば、それは2の随想的部分に端的に示され、しかも文体的虚構と思える〈消息〉体によって記されているのである。そしてさらに注意すべきは、『日記』の主要部分を占める1の主家賛美の視点で記された記録的部分にも、この「批評と内省」という視点からの作者の憂愁の思いの叙述がかなりの比重をもってなされているのである。

したがって、『日記』の内容は、皇子誕生を中心とした主家顕彰録的内容と作者の憂愁の思いを述べた内省的内容とから成り立っていると言っても過言ではないのであるが、この点についてはこれまでにもいわゆる『日記』の内容のもつ二面的性格として多くの議論が費やされ、『日記』研究の主要な論点となってきた。そしてまた、現存『日記』の多様な表現形態（現存形態）についても、2のいわゆる〈消息〉体による随想的部分と、3の年次不詳の「十一日の中宮の御堂詣で」と「道長と作者との和歌贈答」記事に関しては早くからその位相が問われ、脱落・錯簡説を交えながら議論がなされてきたのである。

では、これら『日記』の内容のもつ二面的性格と現存形態についてどのような見解が見られるのか、その主なものについて概観しておきたい。なお、便宜上、前者と後者とを分けて概観することとする。

二　『日記』の内容の二面的性格と多様な表現形態に関する主な見解について

1　『日記』の内容の二面的性格に関する見解について

まず、早くから提起された見解として、作品の成立論とも絡んで現存『日記』に先立つ「原日記」を想定した二段階成立論があった。南波浩氏や宮崎荘平氏の見解がそれである。南波氏は「原日記」は主家の要請によって皇子誕生の慶祝記として記され、いったんは献上されたが、作者はそれに飽き足らず「原日記」を改編するとともに〈消息〉体による随想的部分を加筆して現存日記を作品的に変貌させたとし、[2] 宮崎氏は「原日記」を主家賛美の視点による伝統的な女房日記と捉え、それはあくまでも女房の立場で書き記した日記として献上され、後になって作者がそれを母体に、華麗さと対峙しはみ出したわが悲愁の思いを語ることをテーマに、改めて日記文学作品として執筆作成したとした。[3] いずれも『日記』の持つ、主家賛美と憂愁の叙述という内容上の二面的性格を「原日記」から「現日記」への段階的過程の中で生まれたとするものである。

しかし、「原日記」の想定はあくまでも仮定の上に立ったものであり、両氏とも現存『日記』は作者の意図による改めての日記文学作品の作成と捉えておられるのであるから、しいて段階成立論を採らずともそのまま現存『日記』

をトータルな作品として読み解いて行くことも可能なのではないかということになる。したがって、のちに表現形態上の問題点について述べる際にも触れるが、『日記』についての資料が出尽くしている今日では、むしろこの内容上の二面的性格についても、現存『日記』のあるがままの形の中で読み取ろうとする方向にあるといっても過言ではなかろう。

そしてもしそうであるならば、『日記』のもつ憂愁の思いの叙述をどう読むかということになるが、かつて清水好子氏が、作者の憂愁の思いの叙述について、人間の有限を自覚して仏道を志し、死後の見えざる生について思い悩むのが当時の知識人のスタイルで、そういう悩みを持つ知的女房を擁すること自体が主家の精神的優位性を誇示することである。したがって個人の内面の憂いを慶賀の記録に書き込むことは容易に受け入れられることであったとされた[4]が、これなどは内容上の二面的性格についての今日的読み方の方向性を示唆するものであった。その後、山本利達氏がこの清水氏の読みを日記全体の読みに敷衍させ、『日記』を道長の要請によるものとした上で、その主題を中宮の儀式の立派さを記録しようとしたところにあると見、作者の憂いの心の叙述は中宮や儀式の立派さを引き立てるための叙述と規定した。つまり主家慶祝記の中で一見矛盾するように思われる憂愁の思いの叙述を一つの主題のもとに機能的に位置づけられたものとしたのである[5]。そして同じ視点から佐藤和喜氏は作者の憂愁の思いの叙述は場の中に存在する女房が自己の位置から中宮・道長を賛めるという日記の基本的な在り方に沿うものとし[6]、福家俊幸氏は憂愁の思いの叙述は身の程をわきまえた女房の証であり、そうした優れた女房によって描かれる『日記』は主家を顕彰することにもなるとした[7]。これらの見解はいずれも『日記』を道長の要請になる主家慶祝記と捉える点で一致し、作者の憂愁の思いの叙述は主家の立派さを顕彰するため、ないしは作者自身の自己の精神的優位性の証のためのものであると位置づけた。

一方、こうした見解に対して、室伏信助氏は『日記』を一つの主題のもとに構成されたと見る点では同じであるが、

『日記』の主題を、山本氏のように一概に中宮や儀式の立派さを記録することに集約することはできないとして、むしろそれよりも、作者を囲繞する異次元の公的世界をまじまじと見つめ克明に記録する姿勢の中で、巻き起こる内心の葛藤を筆録することで、内在化した新しい次元の世界が確立していくところにあるとし[8]、『日記』は外在する華麗な世界と緊張的に対峙して生きる作者の、表現の軌跡としてその方向で読まれねばならないと言われた。この室伏氏の見解は、いわば、秋山虔氏の、『日記』は道長家の慶事である中宮御産の記としての性格が強いとしながらも、そこには記録さるべき対象とともにそれに立ち向かい積極的に介入することで、うねりのびて行く紫式部独自の姿勢が同時に客観化され、日記の記述はそれを書きつづる作者の精神の軌跡をしるす営為となっているという見解[9]にもとづいたものといえる。

『日記』の内容上の二面的性格についての議論は、むろん、ほかにも数多くあるが、少なくとも今日、作品の二段階成立論はともかくとして現存『日記』を一つの主題性のもとにトータルな作品として読み解いて行こうという方向性の中では、山本氏をはじめとする諸氏の、あくまでも主家要請による慶祝記としての読み（憂いの叙述を中宮や儀式の引立て役ないし作者の優れた精神性の証として位置づけようとする）と、秋山氏や室伏氏等の『日記』始発時は主家要請による慶祝記的性格をもちながら、外在する公的世界と緊張的に対峙して生きる作者がやがて自らのことばによって作者独自の表現世界を構築していったとする読み（そこでは憂愁の叙述は作者の心の表白と捉えられる）とに大きく二分されている感があり、いずれもそれぞれに説得力のある卓見である。

しかし、ここで注意しておきたいのは、『日記』の始発について、前者はもとより後者の見解も、主家要請による慶祝記的性格をもつものであったことを前提としていることである。おそらくそれは今見て来た研究史の流れの中にあって大方の認めるところであろう（むろん、はじめから全くの個人の日記とする見解もある。が、いまはそれについては触れない）。したがって、問題なのは主家要請による慶祝記的性格をもつと思われる日記の中での作者みずから

の自律的表現行為をどう捉えるかということになろう。つまり、前者は、あくまでも『日記』を慶祝記と規定し、その中で作者の憂愁の思いの叙述は作品が要請した一つの修辞と見、後者は、当初は慶祝記的性格をもっていたものの、書くという行為が新たな主題を生み、憂愁の叙述は『日記』の変貌がもたらした所産と捉えているのである。もとより『日記』の執筆契機を道長からの要請によるということはあくまでも『日記』からの想定に過ぎず、多様な表現形態をもつ現存『日記』の作品形態が何を意味するのかを意識したとき、いわゆる慶祝記的性格のみが『日記』の作品機制と言えるかどうか検討する余地があるように思えるのである。なお、その点について述べる前に、次に多様な表現形態に関する見解のいくつかを見ることとする。

2　『日記』の現存形態に関する見解について

現存する『日記』の作品形態は、二、で示したように、1．寛弘五年秋から寛弘六年正月に至るまでの敦成親王誕生を中心とする記録的部分、2．寛弘六年正月記事に接合する形で突然始められるいわゆる〈消息〉体による女房批評や自己の憂いに満ちた人生述懐をする随想的部分、3．年次不詳の二、三の記事、4．寛弘七年正月の敦良親王の御五十日儀を中心とする記録的部分からなっており、それぞれに多様な表現形態を見せている。

これまでの研究史の中で最も議論を集めたのは、いうまでもなく、2の〈消息〉体による随想的部分である。かつては消息文竄入・非竄入の問題として、日記とは異なる消息文の竄入説が提起されたが、このいわゆる〈消息〉体による随想的部分の、寛弘六年正月記事との接合のしかたがきわめて自然であることや消息文としての冒頭部分がないためどこからを消息文と認めるのかその判定が難しいことなどから多くの非竄入説が提示され、今日では、今井卓爾氏の人物批評というはげしい内容のものをやわらげるための技術的な操作という見解[10]をはじめとして、秋山虔氏の自己の内部の、自己のもっとも理想的な理解者である他者にむかって語りかけたもの[11]、あるいは曾沢太吉・森重敏氏の

日記的部分における紫式部個人の感想・見解の行きつくべき魂の告白[12]というに至って、いわゆる〈消息〉の形式に仮託した文体的虚構とみなされたのである。むろん、藤村潔氏は今日なお消息文竄入説を掲げている[13]が、『日記』を現存形態のままに一つの作品として読み解こうとしている今日の研究動向の中では、非竄入説つまり作品の主題ともかかわりあった虚構的文体とみるのが一般である。

さて、『日記』はこのような異質とも言える表現形態をもつ「随想的部分」の後に、これまた年次不詳の二、三の記事がくる。すなわち「十一日の暁」の記事と、二つの「道長と作者との和歌贈答」記事である。これらの記事は寛弘六年正月記事のあとにきているだけ、その年次の捉え方によっては時期的齟齬が生じ内容的にも個々に独立した感を免れず、そのためこれまで脱落・錯簡が想定されて来た。ところが近年、室伏信助氏はこの「十一日の暁」の記事並びに道長との和歌贈答記事に前半の記録的部分の序章部との対応を見、前半の記録的部分を第一部、〈消息〉体部分を第二部、後半の記録的部分を第三部と称され、これらの記事を第三部の序章部と捉えられた。つまり、第一部の序章部が特定の日付を持たない上に道長と作者との和歌贈答記事がすぐそのあとに続いている点を指摘し、その対応関係に相当するこの「十一日の暁」の記事も特定の年月が記載されず、あえて「十一日」という日付が記されたのは第三部が第一部の敦成親王誕生記に対する敦良親王誕生記であるからで、その冒頭文に第一部の皇子誕生を象徴する「十一日の暁」を冠することで見事な照応関係を成り立たせたのだと言われ、こうした「相対関係をもつ表現の理法を叙述の過程から帰納された波動的表現」と言われている[14]。したがって、ここにみる室伏氏の見解は、これら「十一日の暁」の記事並びに二つの道長との和歌贈答記事を断片記事とし、寛弘七年正月記事を補遺とみるこれまでの諸説（たとえば稲賀敬二氏[15]、萩谷朴氏[16]など）とは異なり、日記全体の構造を絡めた斬新な見解といえる。福家俊幸氏もこの室伏氏の見解に触発されて「十一日の暁」を日付の符牒と捉え、そこに敦良親王誕生の暗示を読むとともに、敦良親王生誕を暗示することで〈消息〉体による空白の時間を埋め、寛弘六年正月から寛弘七年正月への自然な橋渡しを

狙ったものとして「十一日の暁」の記事を『日記』作品内に位置づけた。[17] また、藤本勝義氏は「十一日の暁」にはじまる三つの記事は結果的に自己の才覚を示しており、作者は自己主張のためにあえて年月を朧化したのであり、それは消息文からの紫式部自身の明確な意識の流れとして把握できるとして室伏氏とは内容的に見解は異なるものの、同じくここの部分の脱落、錯簡あるいは竄入は考えられないとされている。[18]

すなわち、これらの見解はいずれも『日記』を現存形態のままに一つの作品として読み解いてみようとする試みから出ており、首肯せられるものを数多く持っている。したがって、一つの主題のもとに現存『日記』をあるがままの形でトータルに読もうとする近年の傾向の中では、2の「随想的部分」については虚構としての〈消息〉体仮託説に落ち着いており、3の年次不詳の「十一日の暁」の記事ならびに道長との和歌贈答記事は後半の記録的部分とともに『日記』全体の中で改めて問いなおそうとする動きとして注目すべきと考えるのである。なお、冒頭部についての首欠、非首欠については触れない。

三　『紫式部日記』という作品をどう捉えるか

以上、見てきたように『日記』の作品的性格を考える上での、内容上、表現形態上についてのこれまでの研究史は複雑多岐に亙っているが、少なくとも次の点について改めて確認しておく必要があろう。それは第一に、『日記』の読みは現存形態を作品世界の持つ主題性のもとにトータルな作品として読み解いて行こうという方向性の中にあるということ。第二にそうした読みの中で、『日記』の始発については、道長要請による中宮女房紫式部の『日記』生成ということが考えられること。その結果、第三にこうした『日記』の始発にかかわる慶祝記的性格をもつと思われる日記の中で書き手である作者自身の自律的表現行為をどう捉えるか、つまり道長要請による『日記』をどう措定する

かということである。この、第三のいわば『日記』の読みについていかに考えるか。私見を述べておきたい。

つまり、『日記』の内容の二面的性格については主家賛美と憂愁の思いの叙述とがあまりにも乖離的であるがために互いに離反しているように捉えられ、その『日記』内位置づけについても、先に見たとおり大きく二分されているのであるが、私としては、むしろそれらは表裏一体の関係、つまり二重構造を示していると考えるのである。たとえば、あまりにも有名な『日記』冒頭部末尾における次の表現を例に考えてみたい。

御前にも、近うさぶらふ人々、はかなき物語するを、聞こしめしつつ、なやましうおはしますべかめるを、さりげなくもてかくさせたまへる御有様などの、いとさらなることなれど、憂き世のなぐさめには、かかる御前をこそたづねまゐるべかりけれと、うつし心をばひきたがへ、たとしへなくよろづ忘らるるも、かつはあやし。

（一一三頁）

いうまでもなく、この『日記』冒頭部は、寛弘五年秋、作者が仕える中宮彰子が一条帝の第二皇子出産のために里下がりをされた道長邸の夕景色の描写から始まっている。「秋のけはひ入りたつままに、土御門殿の有様、いはむかたなくをかし。」と、紅葉の始まったばかりの邸内はこよなく美しく、そうした中での、出産を間近に控えた中宮の、わが身の辛さを隠して周囲の人々を気遣う人柄の優しさが「いまさらいうまでもないこと」と賛美される。そしてさらに「憂き世のなぐさめには、かかる御前をこそたづねまゐるべかりけれと、うつし心をばひきたがへ、たとしへなくよろづ忘らるるも、かつはあやし。」とまで言う賛美のしかたは、ある意味では賛美の強調表現と言ってもよいものであり、山本利達氏のいわれるように[5]中宮の立派さをいうために「憂き世」の思いを抱く自分が引立て役を務めているとも言えよう。だが、注意したいのは「かつはあやし。」を「それほど中宮は立派である」と捉えるだけでよいかということである。私は、ここでの賛美のしかたが「憂き世」の思いを抱いている自分だからこそ一層慰められるのだと、わが「憂き心」との対比においてなされていることを考慮すべきと考える。つまり、「うつし心」（現実に抱

いている憂き思い）が「たとしへなくよろづ忘ららる」ことを喜んでいるのではなく、「かつはあやし」と訝っていることである。あたかも華麗な道長世界に組み込まれていきそうになる危うい自分の存在への思いを伝えようとしている感がある。「憂き世のなぐさめには」以下の部分は、あきらかに中宮を称えている女房としての自分を語っているのであるが、同時に彰子後宮における中宮女房としての自己の存在をも語っているのである。したがって、この『日記』の冒頭から見られる作者の憂いの叙述は単に慶祝記という枠組の中での他律的な位置づけだけでなく、『日記』の書き手みずからの当初からの自律的な位置づけをも示していると言える。言い換えれば『日記』ははじめから主家賛美と自己の宮仕え女房としての自己確認という二つの視点によって書かれているのである。『日記』は主家顕彰録的論理とともにもう一つ中宮女房としての自己確認の論理をもっているといってもよい。[19] ただし、それは単なる公的私的視点というものではなく、その視点はあくまでも一人の女房として対象を見たときに抱く表裏一体の二重性におかれている。どちらの視点に比重を置いて書くかは対象の違い、あるいは対象によって決まると言ってもよい。おそらく、道長はそういう視点の自在な「女房の日記」を想定しなかっただろうか。前述したように道長は男性官人の定型的な漢文日記ではない女房の仮名日記、それも文才の傑出した紫式部の書く日記に期待を寄せたと思われる。当時、女房の手になる仮名の日記は「歌合」の「仮名日記」に多く見られるが、それらの特徴のひとつに筆録者の感想が自在に入っていることである。たとえば、中野幸一氏も指摘されるように、[20]『天徳内裏歌合仮名日記甲』に次のような表現がある。

童四人、洲濱舁きて參る。（中略）丈のほど髪の長さよく整ひて、かたほならず。（中略）装束、赤色に櫻襲なるべし。されど見えねばかひなし。（中略）かくて歌ども合はするに、いかゞありけむ右負けにけり。

（日本古典文学大系『歌合集』九四～九六頁）

この「歌合」は村上天皇の強い心入れによって開催されたもので、仮名日記甲の筆者はその内裏女房で文筆の誉れ

高い伊勢かといわれているが、終始帝の心情に密着した執筆姿勢を取るとともに、ひとりの女房の視点から状況をよく伝えて来ている。[21] 中野氏はこれらの表現について、客観的であるべき記録が筆者に引き寄せられ、ごく自然に記録を逸脱していく性質は、女性の記録の看過できない性格といわれるが、道長はこうした仮名日記の女性の表現的特性をもとより知っていたであろう。そしてまた、先にも述べたように、道長は『源氏物語』の作者の目の確かさ、文筆能力の高さを評価した上で日記の執筆を要請したであろうし、作者自身もそうしたことへの自負の念を『日記』の随所に書きもしている。したがって、作者は『日記』生成にあたっては単に記録に終始することなく作者独自の自由な執筆が許容される保証もあったのではなかろうか。「記録にないもの、はみ出したものを書くのが女房の日記」[22]というのが当時の一般認識であったとすれば個としての作者の目によって捉えられた出来事がたとえそれが主家の要請に基づくものであったとしても、作者の意図する主題のもとに書き記され、一人称文学としての日記が生成される可能性は十分あったと言える。いいかえれば『日記』は作者の責任において書き記されたとも言えるのである。

たとえば、『日記』にみられる次の一文（敦成親王誕生直後の記述）からもそれがうかがえる。

例の、渡殿より見やれば、妻戸の前に、宮の大夫、東宮の大夫など、さらぬ上達部も、あまたさぶらひたまふ。殿出でさせたまひて、日ごろうづもれつる遣水つくろはせたまひ、人々の御けしきども、心地よげなり。心のうちに思ふことあらむ人も、ただ今は、まぎれぬべき世のけはひなるうちにも、宮の大夫、ことさらに笑みほこりたまはねど、人よりまさるうれしさの、おのづから色に出づるぞことわりなる。（一三六～一三七頁）

ここでの「例の、渡殿より見やれば」はその場で見ている作者の目の位置の表明であるとともに、〝ほかでもない私が見ている〟ということへの作者の断りとも読み取れよう。そして「人々の御けしきども、心地よげなり」と対象を客体化して見ようとする作者の心理的位置表明にもなり得ている。そしてそういう物理的、心理的位置表明をする作者自身の内実を「心のうちに思ふことあらむ人」で示し、「ただ今は、まぎれぬべき世のけはひなる」で主家の栄

華の時に居合わせた作者の現実感覚が語られる。つまり「心のうちに思ふことあらむ」自分までもが「ただ今は、まぎれぬべき世のけはひなる」という意識を抱くほど、皇子誕生はすばらしいことなのだと、賛美の視点に自己への批評的視点を持ち込むことで改めて賛美の奥行きの深さを強調しているということになる。むろん、そこには彰子後宮における作者みずからの宮仕え女房としての自身に対する思いをも再認識していくという仕組みが二重構造的に用意されているのであるが、このような賛美の構造は『日記』の随所に見られ、2の「随想的部分」における、いわゆる〈消息〉体による痛烈な同僚女房批評の展開も、道長後見による彰子後宮の政治的経済的絶対化の中で、作者はもとより、中宮女房一人一人の在り方を述べるがためのものであり、いわば先に述べた自他ともに向けられた批評精神は賛美の視点に重厚さを与えこそすれ、反するものとして位置づけられてはいないのである。また、同じ「随想的部分」における長大な自己の内面感懐の記述も自身を客観視した作者の心理的位置確認の一つであるとともに、その記述の終末部において宮仕え生活に帰属してゆく自己のありようを述べている点において逆に賛美の論理が貫かれているものと考えられる。つまり、〈消息〉体部分における自他ともに向けられた批評精神は、別言すれば、彰子後宮の文化的優位性（みやび性の高揚）への飽くことのない希求に裏付けられたものであり、斎院御所や定子後宮を多分に意識したものであった[23]のである。

さて、このように見てくると『日記』におけるに内容上の二面的性格、ないしは表現形態上、異質と思われる〈消息〉体部分は、宮仕え女房としての作者の現実認識の表出のため以外のなにものでもなく、むしろ鋭い現実認識に基づく批評精神に裏付けられたより高次の賛美の視点を物語り、『日記』の視点の二重構造性を見事に表明していることにもなっているのである。そして、この『日記』の「賛美と批評（内省）」という視点の二重構造性は、多様な表現形態をもつ『日記』の現存形態そのものについてもいえるのであり、いわゆる〈消息〉体部分のあとに続く、3の「十一日の暁」の記事と二つの「道長と作者の和歌贈答」記事は、まさに、前者は中宮大夫藤原斉信と作者との機知

に富んだ漢詩句のやりとりを、後者は左大臣藤原道長と作者とのみやびな和歌の贈答を述べたものである点からも、〈消息〉体部分で述べられた彰子後宮における自己の存在確認の意識と明らかな関わりを見せていることになる。したがってこの3の部分は脱落・錯簡などではなく、トータルな日記の一部として読むことができるのであり、むしろこれらのみやびなやり取りの部分がここに位置づけられることによって、寛弘七年正月の敦良親王関係の記録的部分とのつながりがもたらされ、そこにおいて作者の宮仕え生活への精神的回帰が物語られることになるのである。そうした意味において、年次不詳の「十一日の中宮御堂詣で」と二つの「道長と作者の和歌贈答」記事は、〈消息〉体部分から寛弘七年正月の敦良親王御五十日儀を中心とした記録的部分への自然な収束をもたらすための橋渡し[17]的機能を示しているといえよう。そしてこれらの年次不詳のみやびな記事は、それこそ室伏信助氏が言われるように、『日記』冒頭の、道長邸の自然描写から始まって、やがて道長と作者とのみやびな和歌贈答記事や道長長男頼通とのみやびなやりとりの記事に繋がっていく部分と見事に照応し合っているのであり、前者が第二皇子敦成親王誕生を中心とした記録的部分の「序章部」を形成していると考えるとすると、後者は、後続の寛弘七年の第三皇子敦良親王の御五十日儀を中心とした記録的部分の「序章部」に相当すると言ってもよいのではないかと考える。

そしてさらにつけ加えるならば、敦成親王誕生を中心とした記録的部分の「序章部」は、『日記』の冒頭に位置することと相俟って、その内容を第1節から第5節までと捉えたとき、第4節末尾に付けられた次の表現、

かばかりなることの、うち思ひいでらるるもあり、そのをりはをかしきことの、過ぎぬれば忘るるもあるは、いかなるぞ。　（一二六頁）

も、先に述べた冒頭節末尾の表現「うつし心をばひきたがへ、たとしへなくよろづ忘らるるも、かつはあやし。」と同様に、華麗な道長世界に組み込まれていきそうになる危うい自分の存在への思いを伝えようとしているのであり、中宮女房として彰子後宮における自分の存在性を確認しようとしているのではないかと思う。ここでの「かばかりな

ること」とは、いうまでもなく第4節に記された「道長長男頼道と夕暮れ時のみやびな時間」を受けているのであるが、実際には、直前の第3節の「朝霧の中での道長と作者の和歌贈答」というみやびな時間をも含まれていると思われ、そうした賛美すべき「みやびな時空間」を「過ぎぬれば忘るるもあるは、いかなるぞ。」と言ってのけること自体、逆説的であるがために、かえってここにも作者の、彰子後宮におけるみやびの担い手としても自己確認をしようとする思いが浮かび上がってきているように思えるのである。こうした意味において、敦成親王の誕生を中心とした記録的部分の序章部は、まさしく『日記』全体の序章部と捉えても差支えないように思う。

かくして私は、作者の『日記』執筆の論理には、彰子中宮腹二皇子誕生の主家慶祝記を中心に、道長後見による彰子後宮の政治的経済的絶対性を語る論理と道長からの出仕要請に絡む作者の、彰子後宮におけるみやびの担い手としての自己の存在性を確認する論理とが二重構造的に内在していると見ているのであるが、それはこうした序章部のありようからも言えるのではないかと思う。

なお、先に二、の冒頭で示した『日記』の内容と表現形態のありようを改めて整理し直すと次のようにもなろう。分節は同じく「新編日本古典文学全集『紫式部日記』」に拠る。

1. 序章部（第1節～第4節）
　①（寛弘五年秋）土御門殿の夕景色と中宮安産祈祷
　②道長と作者との和歌贈答
　③道長長男頼通像と回想
2. 敦成親王誕生を中心とする記録的部分（第5節～第45節）
　①皇子出産を控えた中宮周辺の様子
　②待望の皇子誕生と打ち続く慶祝行事
　③一条帝の土御門邸行幸と翌日の記事、五十日の祝い
　④御冊子づくり、里居の述懐
　⑤中宮内裏還啓、宮中五節、年末述懐
　⑥敦成親王新年（寛弘六年）御戴餅儀
3. いわゆる〈消息〉体による随想的部分（第46節～第53節）
　①中宮女房個人批評
　②斎院所と中宮所の比較批評
　③和泉式部、赤染衛門、清少納言批評
　④自己の人生への内省述懐
4. 後半の序章部（第54節～第56節）
　①中宮御堂詣でと土御門邸の暁景色
　②二つの「道長と作者との和歌贈答」記事
5. 敦良親王誕生を中心とする記録的部分（第57節～第60節）
　①敦成親王・敦良親王新年（寛弘七年）御戴餅儀
　②敦良親王御五十日儀

つまり、3のいわゆる〈消息〉体部分を挟んで、前半1・2において道長待望の中宮彰子腹皇子（一条帝第二皇子敦成親王）誕生に沸く道長家の慶びが記され、後半4・5においてさらなる弟宮（一条帝第三皇子敦良親王、『日記』では「二の宮」と表記）誕生に伴う慶祝行事を記すことで道長家の二重の慶びが記され、いわば中宮彰子腹二皇子誕生によって政治的社会的基盤が絶対化されていく主家の栄華相が顕彰録的に記される中で、1と4とは位相的、内容

的に照応しあい、1は前半の慶祝記的部分ないし『日記』全体の序、4は後半部の序と見ることができるのである。

現存する『日記』をどのような作品として把握するかということは、ひとえに『日記』をいかに捉え、どのように読むかということにかかっているのである。それゆえ、本書の「はじめ」に当って、まずは、『日記』研究の根幹でもある『日記』の内容と多様な表現形態がどのようなものであり、それらが相互にどのように関わりあっているかについて考察し、現存する作品形態を一つのトータルな作品としてどのように捉えるかについても、これまでの主たる研究足跡を視野に入れながら、私なりの見解を示した。

本書では、以上の見解をもとに、これら『日記』の内容と表現形態とを支える作品内の個々の表現が作品世界の中でどのように機能しているかについて考察したいと考えている。先にも述べたように、私は作品の中個々の表現は表現主体である作者によって作品世界を構築するために位置づけられ、他の文脈との関わりにおいて作品的意味性を担わされているとみており、これら『日記』の作品世界を担う個々の表現のありようとその意味性を読み解かなければ、『紫式部日記』の作品解明は始まらないのではないかと考えているからである。

本書の構成は次のとおりである。

はじめに　―『紫式部日記』という作品―
第一章　主家賛美の表現（1）―「をかし」をめぐって―
第二章　主家賛美の表現（2）―「いまめかし」をめぐって―
第三章　《作者の憂愁の思い》を担う表現―「憂し」をめぐって―
第四章　『紫式部日記』の回想の方法
第五章　『紫式部日記』の表現構造
第六章　『紫式部日記』の表現と文体
第七章　『源氏物語』の表現
おわりに　―『紫式部日記』の作品世界

なお、本書各章で引用する『日記』の内容と表現形態の分類については、便宜上、二、の冒頭に掲げた1～4の分類に従っていることをお断りしておく。

注

（1）平安時代の女流日記文学作品の個々の特質についての比較は、中野幸一氏「女流日記文学における『紫式部日記』の位置」（『女流日記文学講座三』平成3・7　勉誠社）に詳しい。
（2）「紫式部日記の変貌」（『源氏物語と女流日記　研究と資料』昭51　武蔵野書院）
（3）「紫式部日記の作品性格」（『日記文学　作品論の試み』昭54　笠間書院）
（4）『紫式部』（昭48　岩波新書）
（5）新潮日本古典集成『紫式部日記』（昭55　新潮社）
（6）「紫式部日記の表現」（「宇都宮大学教育学部紀要」平成1・2）
（7）「『紫式部日記』の憂愁の叙述について―女房日記の生成―」（『国文学研究』平成2・10）
（8）「主題の形成」（『別冊國文學　王朝女流日記必携』昭61　學燈社）
（9）「日記文学論」（『王朝女流文学の世界』昭47　東京大学出版会）
（10）『平安時代日記文学の研究』（昭32　明治書院）
（11）日本古典文学大系『紫式部日記』解説（昭33　岩波書店）
（12）『紫式部日記新釈』（昭39　武蔵野書院）

（13）『源氏学序説』（昭62　笠間書院）
（14）「紫式部日記の表現機構―「十一日の暁」をめぐって―」（『國語と國文學』64―11　昭62・11）
（15）「紫式部日記逸文資料「左衛門督」の「梅の花」の歌―日記の成立と性格をめぐる憶説―」（『國語と國文學』48―4　昭46・4）
（16）『紫式部日記全注釈』下巻（昭48　角川書店）
（17）「『紫式部日記』十一日の暁の記の方法」（『中古文学論攷』平成1・12）
（18）「紫式部日記「十一日の暁」段の構造と成立（一）（二）」（『平安文学研究』69・70　昭58・7／12）
（19）日向一雅氏『源氏物語の王権と流離』（平成1　新典社）
（20）注（1）に同じ
（21）詳しくは拙稿「天徳内裏歌合仮名日記にみられる女房の視点」（『CARITAS』22　昭63）参照。
（22）清水好子氏『源氏物語論』（昭41　塙書房）
（23）本書第四章第二節参照。

※『日記』の最近年の研究動向については、福家俊幸氏の「『紫式部日記』研究の現在」（『紫式部日記の表現世界と方法』平成18　武蔵野書院）がたいへん詳しいのでそれを参照していただければ幸甚である。

第一章　主家賛美の表現（1）――「をかし」をめぐって――

本書の冒頭（「はじめに」）でも述べたように、『日記』は今日なお、大別して次のような問題を抱えている。

第一は、『日記』の作品内容が持つ二面的性格、すなわち作品主題のもつ二重構造性の問題であり、『日記』が一条天皇の中宮彰子腹二皇子誕生を中心とする主家顕彰録的性格を濃厚に持った日記であるにも拘わらず、作者の憂愁の思いが随所に織りこまれているのはなぜかという問題である。

第二は、『日記』の現存形態が有する多様な表現形態の問題である。つまり『日記』は、寛弘五年秋の第二皇子敦成親王誕生に関する記録的部分から始められるものの、寛弘六年正月に至って突如、いわゆる「消息」体によって、作者の痛烈な中宮彰子方女房批評や自己の人生的内面表白がなされる随想的部分、次いで、年次不詳の二、三の記事が挟み込まれるなどした後、寛弘七年正月の第三皇子敦良親王「御五十日儀」を中心とした記録的部分で擱筆されるという『日記』の現存形態は何を意味するのかという問題である。

私は、こうした『日記』の作品解明のためには、これら第一と第二の問題について個々に解明するだけでなく、むしろ、これら二つの問題が相互にどう関わりあっているかを探ることが何よりも重要と考えており、その手掛かりを探るために『日記』における個々の表現がもつ作品的意味性について考えてきた。なぜなら、前述したように、作品における個々の表現は、作品世界を構築するための一つの方法として作者によって位置づけられ、同時に他の文脈との関わりにおいて作品的意味性を担わされていると考えているからである。